

母校の百周年に寄せて

五木寛之さんのこと

黒木久夫

5年間、60回に及んだNHKラジオ深夜便、人氣番組五木寛之さんの『わが人生の歌語り』が、3月で終了した。この中で五木さんは好きな童謡として『花嫁人形』をあげ、戦後の好きな歌として、『麦と兵隊』『別れのブルース』『湖畔の宿』をあげていた。五木さんは、直木賞作家としての高名と多くの作品そして、数々の歌の作詞も手がけている。

私が、五木さん（本名松延寛之以下寛之さんと略称）とお会いしたのは丁度60年前である。昭和

25年4月、私は、福島高校に入学した。一学年上に寛之さんが在学していた。現在は八女市役所が建っている場所に当時の福島高校があったが、その狭い運動場で寛之さんはテニス部員としてラケットを振っていた。まぶしい太陽の下で上下白のテニスウェアがまぶしかった。練習中彼は、何故か黒の学生帽をかぶっていたが、その風景を今でも思い出す。寛之さんは又、福島高校新聞の編集にも携わり『学生』という小説を連載していた。福島高校新聞はそのレベ

ルを福岡県内で高く評価されていた。厳しい環境下ではあったが私たちは多くの立派な先生方に恵まれ大いに高校生活を満喫した。同級生は優秀な人たちが多かった。入学して2年が経った3月のある日、私は同級の藤島充雄君と寛之さんと呼び出されそれぞれ1冊の参考書を戴いた。当時は、先輩から自分が勉強した参考書を後輩に譲る風習があった。藤島充雄君は国語、私には英語の参考書が手渡された。『俺は早稲田に合格した。お前達もこの参考書で勉強しろ』と言われた。この言葉に私は大きな刺激を受けた。翌昭和28年上京し、1年

浪人の後東京大学に合格することが出来た。福島高校は今年100周年を迎えたという。入学して60年、今もあの福島高校で学んだときの恩師、友人達、そして、参考書を寛之さんから戴いたとき

の情景は忘れることの出来ない私の宝物である。大変な時代ですが後輩のみなさんのご活躍を祈ります。（追 福島高校時代の恩師西村心華先生は去る6月19日、逝去されました。）

昭和十五年 一高合格(佐藤良一)
昭和二十六年 長崎大学合格(吹春寛一)
昭和二十七年 早稲田大学合格(松延寛之)



五木寛之さん自筆のメッセージ

楽しい仲間たち
正修館道場

に地域の関心が伝統的に高い所です。小さい時から練習に打ち込んできた少年、少女たちが各高校に進んで切磋琢磨して技を磨いています。私たちが四百年以上の歴史を誇る武道をさらに発展させるべく、心、技、体三位一体の完成という永遠の課題に向かって頑張っています。

あなたも武道を通して心と体を鍛えませんか。体験、見学待っています。初心者歓迎します。

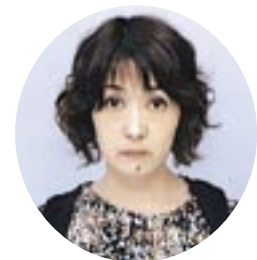
今年玉竜旗大会では、八女出身の高校剣士が大活躍しました。八女は昔から柔・剣道に対して子ども、父兄、指導者それ

正修館道場

館長 樋口正實

八女市西矢原町

☎0943-24-5584

街かど
gallery紅彩会同人
井上智加
(広川町)

子供たちも成長し、自分の時間ができた時、以前から気になっていた「絵の教室」を訪ねてみ

ました。今まで絵を描いた事も学生時代にほめられた事もなかったのですが、先



「卓上静物」平成22年度西部水彩展入選

生の「絵を描く決まった方法はない。すべて自由。世界に一枚しかない絵を描きましょう」の一言で勇気が出て、いま身近にある物を描いています。この絵は「ろう画」という技法で仕上げた作品です。「ろう」を塗った後、削ったりする事で深みのある不思議な効果がでて気に入っています。絵を描くようになって、自然の美しさや、形・色のおもしろさに気づき、心が豊かになれたような気がします。

今まで見過ごしていた風景も興味深く新鮮に見えるようになりました。これからも楽しみなが描こうと思います。

花の山旅

①

日吉澄之

今月より私の『花の山旅』でお目にかかります。私のプロフィール 72歳

川崎病院整形外科医師
登山歴約30年
日本百名山完登 現在



日傘かわりのハガクレツリフネ（大分上湯沢山）H22・9・2

年約100回の登山。主に九州の低山、古道、廃道、花咲く山々を歩いています。年に一度、ネパール、ブータン、中国、チベットの高山に植物を求めて歩き回っています。

9月久住山系湯沢台に分け入りしました。吉部から

大船林道、くらそめの滝入口より湯沢台に上がる。巨木が立つ林、道なき道を40分やと尾根に這い上がりました。そこで出会ったのが、つり舟草、写真のように正面から花蜂が口を出し、後ろの蜜が溜まった距から蜜を吸う。蜜の場所が遠い為、花に潜り込んでたくさん花粉をつけ次の花へと移動する。人間の世界と同じく、正面から入らず距を直接かじり、蜜にありつく虫もいる。マダガスカル島は距が30cm以上もある蘭が生息しているという話、それにあわせて花蜂の口も長く進化しているとか 虫と花の進化の競争です。

眩き
スーパードマン

70の太極に突入するや、色んな病気の発症適齢期か、頭の先から下半身まで各種パーツの検査と手当が必要になってきた。家で50年、車15年、家電製品10年、パソコンや携帯電話に至っては数年で更新する時代である。我が身はよくぞここまで正常に動いてくれたと感謝している。勿論目、耳、歯など部分的補修、補強は必要だし、おつむの減退は隠すすべもない。人生90年、100年も珍しくない時代であるが、そろそろ我が身の耐用年数のことが頭をかすめる。

だが一寸待てよ、人工物は壊れたらおしまいだが人間は違う。人間の賞味期限は使用年数と関係あるまい。我々高齢者の脳ミソには長年にわたって蓄積してきた知恵や、生き抜いてきたノウハウがいつぱい詰まっている。齢を重ねてこそ発揮される味がある。大きな付加価値が体脂肪に比例してついている。お茶だって二煎目、三煎目が味わい深い。太陽だつて夕暮れ時が彩りがあつて一番美しく輝くではないか。徒に過ごした人生ではないぞ。年に相応の輝きと活力を目にもの見せてやろう。検診のためベッドに横たわりながらそつと誓った。

Y・U